

## 京都の磁力 京都で学ぶ意義を考える

加藤 敦史(本学教職研究科准教授、教科教育学 社会科)

教育とは何かと問えば様々な答えが返る。狭義に捉えると学校教育がその典型であろう。50年前に大学で学んだ1つに、「教育は、人類の歴史によって創り出され、継承され、発展させてきた文化である」「人間は文化なしでは成長できない」が今も記憶に残っている。

京都に再び暮らして「文化」のもつ重さを実感している。

京都は、研究都市を除けば、人口に占める学生の比率が最も高い都市である。このことは古くから変わらない。このことは何を物語るのだろうか。よく「京都は千年の都」と言われ日本文化が強調される。しかし、毎年、多くの学生が上洛し、その後、地元や首都圏などに就職するために転居をする。大気の循環のように新たな息吹が流れ込み、リノベーションが起こる。よく考えてみれば平安の時代から京都は地方から為政者、僧侶、商人、技術者が集まり、そして彼らは歴史の時々地方に移り住み、京都の文化を伝播していた。今も昔も京都は新陳代謝が行われ、古くて新しい唯一無二の都市である。100年以上の歴史を持つ老舗が多いのも世界では例がない京都であるが、反面、ゲーム、アニメ、情報、医療研究など最先端の研究や企業が集まるのも京都である。日本の半導体メーカーの大半は京都の企業である。

東京は圧倒的な経済力で一極集中が進む。とくに若年層の就職、就学での東京への集中が著しい。そして多くの若者は地元に戻らず、首都圏で居住し定着する。首都圏の若者は他の地域に比

べ、婚姻率が低く、出生率も低いというデータがある。少子化の原因の一つである。東京は地方から若者を集め、留めてしまう。言わば、大気の循環が悪く淀んでいると言っているだろう。

「京都の磁力」という言葉がある。京都のもつ「文化」が国内外からの人や企業を引き付けていることを言う。京都は異なる文化や考え方を柔軟に受け入れ、地層のように積み重なる都市である。海外の大手IT企業の研究ラボが集積し始めている。その理由は京都には優秀な学生が多くおり、相互の交流を深め、文化的な刺激により新たなアイデアや考えを思い浮かべることができるからだ。京都なら働きたいという技術者が海外から集まる。

2023年3月に文化庁が京都に移転した。このことの持つ意味は大きい。中央省庁の東京からの移転は初めてである。東京中心の中央集権体制に変化を起こす機会である。東京を離れることで、視点が変わり、地域の個性が活性化する。文化庁は京都移転に際し、「京都から地方創世の大きなうねりを起こす」と発言している。教育、特に教科教育においては全国画一的ではなく、地域に根差した発想が今後求められるだろう。新学習指導要領では「地域」が今までにはなく多く表記されている。

京都で学ぶ学生諸君には、「京都」で学ぶ意義を考えて欲しい。京都で学んだ経験を各地での教育現場に環流させてほしい。